

戸川行男と八幡学園との関わりに関する一考察

—八幡学園の子どもたちの表現を支えたもの—

阿部アサミ

はじめに

本論文は早稲田大学心理学研究室・戸川行男教授（1903～1992）と千葉県八幡学園の子どもたちとの関わりに着目し、戸川は子どもたちの表現活動を支えていることをどのように考えていたのか、戸川の研究と八幡学園の教育の基本方針を通して、人的・物的環境を明らかにするものである。

八幡学園に関する先行研究はあるが、戸川と学園の教育方針に視点を定めた研究はない。本研究のオリジナルは教育の不易という点からも、戸川が共感した学園の久保寺園長の教育方針を探ることで、特別支援教育の本質に迫り貢献できると考える。

1. 八幡学園の成り立ちと教育

（1）開園当初

八幡学園初代園長、久保寺は¹、「静かな森と広い野に恵まれている千葉縣市川市の八幡に特異な知能、性情の児童をめあてとしての社会的教育施設を営（略）」んだことを述べている。しかし、学園の主事である渡辺によると²学園開設当時は、「地域社会の子どもたちと溶け込んだ雰囲気の中で、少人数で、家庭的環境の中で護り育てていく」という方針を地域の村の人に説明し、協力を求めたところ、猛反対にあったことを回想している。そのため園長・久保寺の自宅を開放し、近隣の児童を対象として「遊戯・読書・英語・造形・音楽」クラブと日曜学校などを開いた。特異児童画の世界³には、地域の村人との収穫感謝祭、夏季林間聚落、宗教部花の日、手芸クラブなどの写真が収められている。こうして村人との相互交流を密にして、八幡学園は昭和3年（1928）全国8番目の障害児入所施設として開園した。

山下清展事業委員である松岡は⁴、「当時、社会に住むことの困難な子供9人を引き取り、家庭的な集団生活を基本に職員は父母として、兄弟として彼らに接し、社会への復帰、自己発現を求めていきました」と記している。

（2）八幡学園の教育方針

園長・久保寺は⁵「学園教師が特異児童を友とする心」の中で、「児童を辛抱強く見つめる心、児童に『ひそめたるもの』『かくれたるもの』を伸ばす世界、『遊び』より『遊び』へ児童の心意に対する教師の観点と判断、『抑えぬ心、責めぬ心、叱らぬ心』は教師の常に抱く心情、児童を生かす『共同労作』の心」などを記している。ここでは教師の心構えに焦点を当て、児童と同じ目線でいながら丁寧に児童の生活を行うこと、生活と遊びの実態を把握し援助にあたること、児童の内なるものを引き出し成長へと導くことなど、常に子供の成長を願い、児童を生かすことを意図して指導にあたるという教育方針を述べている。

(3) モンテッソリーの教育思想

久保寺は⁶、イタリアのマリア・モンテッソリーの「子供の家」の教育指導方法に影響を受け、児童に自発的自己表現の機会と自由とを与えること、さらに作業練習、作業主義的訓練に対しては最も共鳴し、労作による自己発現を行ったことで成果が表れていることを述べている。女史の指導法は個別教育に偏っている点については違う考えをもっていたが、マリア・モンテッソリーが知的障害児に環境を通じた感覚教育を行ったことで成長を促したことについては認める記述をしている。久保寺のマリア・モンテッソリーに関する記述を通して、八幡学園が様々な物的環境を子供たちに提供した意味が明示されたと考える。

(4) 八幡学園の生活と教育の実際

久保寺は⁷、恵まれぬ子があらゆる迫害や罵詈雑言から解放され、八幡学園で自然生活を過ごす中で、「萌え出る才能の芽は、教師のみのがしえぬ大切な点」とし、子供達の長所を「伸びゆくがままにそれを生育させる所に教師の任務と嘉悦とがある」と、子供の指導に当たる教師の重要性を論じている。また教師は自らの指導を通して子供が成長した際に味わうやりがいにも言及している。

いろいろな気持ちの子供をそれぞれの軌道にのせて子供の本質に即した導き方をしなければならぬのでありまして、多くの社会事業の例に洩れず常に細心の管理と絶えざる注意とを必要とするのであります。しかし、一旦、学園で調整された生活が訓練づけられた時には、子供達はそれはそれは生き生きとして自発的に自分を出していくものです。

また学園は、家庭のように「教師は父母として兄姉として彼らに接していくわけでした、此処では師長に対する無意味な恐怖」はないことを説いている。子供のあるがままを受け止め、過ちを叱ることなく温かく受け止めることは、その子らしさを表す土台として大切であることが分かる。ここから教師と子供との信頼関係は強く結ばれていたことが分かる。

暗い性行も学園の集団生活と訓練とのうちに不知不識、陶冶されていきます。教師に対する絶対の信頼は、この小さな社会の中にも一種の正義感を打ち立て、彼らは皆それぞれ、情に優しい兄となり忍従する弟となり師長に対して集団に対してよく奉仕する子供となっていくのです。

ここでは、子供は自分らしさを表すために教師との人間関係と、集団の人間関係を基に育つことを述べながら、学園の生活を通して個人と集団の育ちが望ましい成長を促していることが分かる。

2. 戸川と八幡学園の出会い

(1) 「哲学年誌」第六巻における臨床報告

昭和 11 年（1936）戸川行男は心理学教室の学生を連れて、特異児童の心理学的特性と、また園児の作品がどのように変化していくのかを研究するために八幡学園を訪れた⁸。

戸川は八幡学園の児童の独創的な絵に出会ったことで感動し、昭和 11 年（1936）11 月の早大文学部編「哲学年誌」第六巻に、赤松保羅、内田勇三郎らと共同執筆して Y 男を含む 2 つの臨床例を発表した⁹。戸川らは臨床結果を通して、「彼らの仕事ぶりは悪い。算術能力に劣り複雑な判断推理に関して愚昧である。（中略）併し、『好きな道』に関しては、異常な注意の集中を示し外界を忘れし如くそれに没頭するのである。茲に彼らの甚だすぐれた特殊才能の成立であろう」と、Y 男の絵画の表現は好きなことに没頭したことで自己発揮した表現になっていることを述べている。そしてそれはその姿を温かく受け止めていた教師の存在と、Y 男の力を引出し伸ばしていく物的環境が教師によって設定されていたからだと考える。戸川は「Y 男の第一発見者」であり、「Y 男の心理学研究と美術的研究を真正面から実行した唯一の研究者」と言われている¹⁰。

(2) 早稲田大学における「特異児童作品展」

戸川が八幡学園の在園生の絵を公衆に発表したのは、昭和 12 年に早稲田の第一高等学院学芸大会において絵を 12、3 点並べたことや早稲田の図書館ホールで 3～40 点を展示したことである。続いて昭和 13 年、11 月 8 日から 11 日までの四日間、大隈講堂小講堂において「特異児童作品展」として絵画 93 点、竹細・木工などの八幡学園の児童の作品と同様の施設、滝野川学園とカルナ学園からの作品 200 点ほどを並べた。その後、大阪朝日会館ホールにて昭和 14 年（1939）1 月 24 日から 27 日まで行う。また、銀座青樹画廊の 2 階にて昭和 14 年（1939）12 月 8 日に行った作品展は、銀座始まって以来 2 万人の人が学園の児童の絵を見に集まった。戸川は学園の児童の絵を特異児童作品集として昭和 14 年（1939）12 月 15 日に発行し、美術雑誌「みずゑ」（臨時増刊号）第 420 号 11 月 25 日にも児童の絵は掲載された。こうして、児童の絵は社会に関心を集めていった。

(3) 「特異児童作品集」の出版

戸川は「特異児童の作品集・八幡学園の子供たち」¹¹において、30 人の子供たちの「大抵貧困児、孤児、捨て子、被虐待児などで、救護法という法律で保護され、方面委員の手を経て施設に委託されたものである」「この芸術的雰囲気から余りにもかけ離れた世界に今日の成果をみたことは、奇跡とさえ感ぜられるであろう」と述べている。貼絵で世に出た Y 男については、入園時すでに家庭でチラシを使って習熟していることを母親からの話から聞き取っている。下記は八幡学園が彼の才能に気づいたことを述べている。

Y 男の絵を見て彼をどう指導したかと問う人が少なくない。こんな絵は教えてできるものではないと思うが、この点において一言すると、八幡学園には図画の先生は一人もいない。K 君にしてもその他の子供たちにしても皆、独創であっていかなる指導も受けていない。（略）お手本も先生もないのである。（略）八幡学園の方針は知識を注入したり或る方に押し込んだりしない所にある。子供を愛護し健康にし活発にし彼等が自ら自己の何等かの技能を発揮するがごとく、指導していく。

(4) 哲学年誌第11巻「意志教育の理論と実際」

戸川は、昭和16年(1941)12月発行の哲学年誌第11巻「意志教育の理論と実際」の中に於いて¹²、意志を育てるにあたって好きなことに向かうことに関して述べている。

「自発性の教育もまた劣らず必要である」こと、「被教育者を完全に自由奔放ならしめ能ふ限り意志の自発性を発揮せしめる必要がある。好きなことを自由に勝手に思う存分に而かも力の限り精一杯やらせる必要がある。意志教育に於けるこの必要性はいくら強調しても充分でない程と云ってよい」と、やりとげる意志を育むために、自発性の大切さと、人に興味・関心をもつ好きなことに向かわせる重要性をまとめている。戸川のこの考えは、人が自己を発揮するための教育の基本と考える。これは八幡学園の指導方法において、子供達が自発的に自由に没頭して表現に取り組んでいることと重なる意味をもっている。

3、特異児童の心の発達

(1) 特異児童とは

戸川は特異児童がどのような原因で起こるかについて、「その中に家系的なものもあれば、出生後の激しい疾患によるものもあれば、或いは母親の胎内において障害を受ける場合もある」ことを記している¹³。特異児童の障害について「生まれる前に、ないしは心身が生育しない子供の時に原因があつて、どうしても成長がある程度以上に出ないものをいうのである」(略)「それが心の発育の故障で、子供のところまでは成長したがそれ以上は伸びなくなつたのだと考えても良い」とまとめている。

(2) 遊びとしての漢字の造語

戸川は、人は「絶えざる追求が我々の生活だと云つても良い」としている¹⁴。人が生きる目的は「いつも現在の外にあり現在の生活の彼岸にある。現在の生活はそれに到るべき道程であり手段である」と大人について述べている。そして「子供は違う¹⁵(略)子供の生活は遊びなのであつて、目的がないから遊びなのである」と、KちゃんやS君の名をあげ、奇抜な文字は文字として意味に使われず、造語を遊びとしていることを記している。「彼らには文字というこの最も差社会的な道具でさえ、道具としての役割を持たない。意味を調べるための道具、思想を表現するための手段として文字が使用されず、装飾、模様、面白い線の組み合わせ、ないしは文字と呼ばれるそんな形象として存在する。大人からみれば遊戯として、と言つても良い」「例えば、金魚と書くと“金”や“魚”の字に装飾がつくのであつて今だに文字の娯楽化を捨てていない」と子供たちの発想の面白さを受け止めている¹⁶。また「Kちゃんにとって文字は表現の道具ではなく絵であり、遊びである」と、Kちゃんが文字を「象徴として意味する記号として使用されず自己を表現する道具として役立てられてない」ことから、「それは遊びである。線の好きなKちゃんは絵の一種として字を書いているのである」と述べている。ここでは子供の表現する姿を、『何を楽しんで表現しているのか』という視点から捉えていることが分かる。

(3) 特異児童の教育の在り方

戸川は¹⁷特異児童の「教育とは、これを利口にし大人にすることではなくして」そのまま「生かしきるといふことである。彼らが本来持つ能力、特性、才能を百パーセントに発現させることである」「一粒の種にも存在するものとしての使命がある。生まれ育ち花を開き実を結ぶことこれである。(略)それは植物の種子にとっては、地を耕し、水をそそぎ、日に当てることである」続いて、「良い生活だけが良い教育である」と生活が力を発揮する際の基本であることを説いている。それは「言うまでもなく子供が自らの自己の才能、天分を發揮しうる如き生活である。これを愛と呼ぶのも正しいであろうし自由と名づけるのも正当であろう」¹⁸ (略) 八幡学園の標語をあげ「踏むな 育てよ 水そそげ」と記している。これは一人一人の育て方について語っていると考える。また、「八幡学園の教育方針の中に『児童を見つめる心』『抑えぬ心』『責めぬ心』『叱らぬ心』が要求されているが、すべて根気である」と子供を受け止める心構えを説いている。(略) 続いて、反復丁寧に説明を行い「叱らずに責めずに嫌がらせせず恐がらせずにそして異常な根気をもって向かわないといけない」と指導の在り方を示している¹⁹。また、「子供にひそんでいる才能を發揮せしめるには『遊び』の態度が必要である」と、子供にとって遊びで育つ意味と、好きな遊びをしている子供の姿を受け止める教師側の姿勢の重要性を説いている²⁰。

具体的な例として、漢字を造語する「Kちゃんは遊びによって成長する、指導者はその成長の遊びが安易に行われるように機会を与え用具を準備してやらなければならない」と、遊びを通して育つための物的環境の準備の大切さを述べている。そして、「彼の為すがままを根気強く辛抱強く見つめているのである」と、子供が興味を持った遊びは「その遊びを助長してやらなければならない」と子供をより良く理解することが、成長の手立てにつながることを説いている。さらに戸川らは「嬉しい、夢中になれる、打ち込める何物かの発見、それが教育の目的だとさえ云えるのであって、色々様々な遊びを興へて観察すること以外道はない」と、子供達が夢中になっている遊びの面白さを捉え、子供の遊びが持続して、子供自身の力になるよう指導していくための、実態把握にも言及していると考え²¹。

この著書において戸川は、子供がもって生まれた気質をあるがままに受け止め、それをより生かせるように指導にあたるという重要性を述べていると考える。

(4) 表現したことを職業訓の練から社会復帰へ

戸川は、特異児童の絵画が世の注目を浴びたことで、絵ばかりを描かせて美術学校と思われていることや、「もっと実務的な職業訓練に力を入れた方が妥当ではないか」との世の中の意見に対して「一生涯、施設にいないのであれば施設に於いての職業教育」として²²、「木工、ミシン、養鶏、その他の課業が設けられている」ことを述べている。そして、生まれた喜びや、感動を表す生活の手段としての「芸術」について、「美の感動が始めて吾々を人間にしてくれる (略)」と、表現する大切さを説いている。そして、例えばY君やN君の二人が学園を離れることがあったとしても²³、「吾々の眼の届かぬその奥底において彼らは高められているのである。より優れてものとなっているのである。彼らがこれ程、深く愛を味わったことは彼らの魂に人格に必ず尊い痕跡を止めていると信ずる。深く愛された

人は、愛を知らぬ人と同じではない」とし、「(略)我々の望みは、彼らの遊びをなんとか基盤に職業に転嫁させてやりたい。そして出来れば一日でも長く彼らを学園においてやりたい」ことを末尾に記している。

また、将来の職業については²⁴。「何か当人にピッタリするものが見つかるまで根気よく色々やらしてみることが必要」であること、「彼らにすでに具わる特徴を職業に転化せしめるのが賢明であろう」として、子供達が物に取り組む実態から興味・関心を捉えることを強調していると言える。特異児童にとって表現が遊びとして夢中になるものであり、自分の経験したことや感じたことを表現する手段として意味をもっていることを述べ、その表現したものを生きていくための職業として、社会復帰につなげていけることを望んでいる。Y男の貼絵がそれであったのは明らかである。

4、特異児童入門

佐藤は戸川らの「臨床心理学」を参考とした、著書「特異児入門」²⁵において、次のように論じている。

教育の目標とか内容については、一般教育となんら異なることはない。特異児教育の対象は、心身に特異性をもつ児童・生徒であるから、教育方法上工夫考慮を要することになる。

ここでは、人を育てる教育における目標や内容の根本は、特異児童においても同じであると述べている。また、指導に当たる根本として「雰囲気をかもしだす教師の意欲、気魄」を示し、さらに「特異児教育の実をあげるためには、特にその指導者の人間性にある」とし²⁶、指導の観点として下記を論じている。

この教育はヒューマニズムの掛け声や、教育愛という抽象的、非科学的な美名によって行われるものではなく、真正純粹なる教育愛を母胎とし科学的、合理的な方法技術と強力な地域社会の援助によらなければならない

ここでは、特異児童の教育は人的環境としての教師の愛情を基盤に、指導方法・計画を積み重ねることと、加えて地域社会の学園を取り巻く人的環境としての人々の理解が必要であることを説いている。

5、イディオサバンと表現

戸川は²⁷知的障害児の中に「ある種の能力において、人を驚かすものが有るということは以前から一般に知られて」といって説き、「イディオサバンというものは斬新な不思議な存在であるが、まだ従来、それは非常珍しいとされている」そして、「八幡学園の子供たちをイディオサバンと呼んで良いか否かは別としてとにかくにもY君等数名が輩出ししかもそ

の絵は甚だ独創的だというふうになると」なぜにこの「能力が存しうるかを真面目に重要な一問題として見る必要が生ずる」と述べている。そして「Kちゃんは三年も前に見た浅草をあれ程詳細に書いている。独創力はどうか、これは殆ど問題にならぬまでに優れている」と、学園の児童の絵とイディオサバンとの関連を問いかけている。

6、学園の標語「踏むな 育てよ 水そそげ」

戸川(1939)²⁸は、子供たちの表現が世の中に認められたことについて、「一体八幡学園の何がこの偉大なる成果を生じた」として、「それは愛である。子供を愛すること、これだけで、これ以外ではない。教育の根本は愛であると云われる。教育とは何かを注入し強制するのでなくして相手の内にあるものを引き出すことであると云われる」とし、「踏むな 育てよ 水注げと八幡学園の標語は語っているが、こうした愛の光の中に子供はのびのびと有るべき全能力をはきだすことが出来る」と述べている。

学園の主事である渡辺は子供たちの接し方について²⁹、一人一人の子供にあった表現を探すこと、職員と子供と一緒に学ぼうとする姿勢を持つこと、表現をしていく過程を大切にすること、これが子供たちを生き生きと、また、大胆で遠慮のない表現活動をさせることになる」と述べている。戸川も渡辺も根底にあることは、子供理解であると考えられる。

おわりに

以上、戸川の自身の研究内容や学園の教育に関する記述から次のことが明らかになった。

戸川と子供たちの関わりについては、学園の子供たちの絵を見たことをきっかけに、子供たちの学園での生活に親しみ、入所経緯や学園の生活、表現の様子や育ちの過程などを、学園の記念誌や著書において詳しく綴るまでになった。さらに戸川は、子供たちの表現した絵や製作物を早稲田大学や他で展示・出版することで、特異児童の存在を世に広げる第一人者とまで言われる存在となった。

また戸川は、特異児童の表現活動を支えていた八幡学園の教育方針を次のように捉えていたと考える。

人的環境としての教師は、子供への愛と理解を基本に子供の自発性を重要視し、個々の表現への興味や実態を辛抱強く見つめる心をもっていた。さらに表現の経過を把握すると共に、児童の好きなことを自由に思う存分にやらせ没頭する事柄を通してより力を伸ばせるように指導していた。これは特異児童の育ちにとって最も重要であったと考える。

物的環境としては、学園の課業や規則正しい生活が異年齢の子供の成長を促したと考える。また農地や表現できる場や空間・時間・教材などの環境を保障しており、様々な体験を通して、子供に内在している表現する力を育むことができたと思われる。

また、八幡学園の教育方針と教育の不易との関連については次のように考える。まず、教育の不易とは「いかに社会が変化しようとも、教育において大切にしたいこと」である。八幡学園の教師たちは、子供の自発性や主体性を尊重し、好きなことに取り組むことを重要視したことや、異年齢の子供たちの育ちを促す温かい雰囲気の人的環境であった。

そして、子供の育ちを促す施設、教材などの物的環境を設定していたことは、現在の教育の人的・物的環境の役割につながる教育の不易であると考ええる。

今後の課題としては、戸川の著書と研究論文と八幡学園の歴史から、特別支援教育の指導の詳細を探り本稿を補うと共に、教育における人的・物的環境の果たす役割と意味に迫りたいと考える。

注

- ¹ 久保寺保久（1939）「特異児童作品集・園児作品集の出版に方りて」春鳥舎 1 頁
- ² 渡辺実、一地域住民の理解を求めて一隣保事業の実践（1928）「特異児童画の世界—山下清とその仲間たち—」編集・発行、八幡学園 1 頁
- ³ 同前 1 頁
- ⁴ 松岡一衛、平成 15 年「久保寺光久・監修、特異児童画の世界—山下清とその仲間たち—」編集・発行、八幡学園
- ⁵ 久保寺保久（1939）「特異児童作品集・園児作品集の出版に方りて」春鳥舎 1 頁
- ⁶ 久保寺保久（1938）労作による自己発現「同前、特異児童画の世界」編集・発行、八幡学園
- ⁷ 久保寺保久（1939）「特異児童作品集・園児作品集の出版に方りて」春鳥舎 1 頁
- ⁸ 久保寺光久・監修「特異児童画の世界—山下清とその仲間たち—」編集・発行、八幡学園、山下清展委員長松岡一衛
- ⁹ 赤松保羅、内田勇三郎、戸川行男「一技能に優秀な精神薄弱児の臨床例」早大文学部編「哲学年誌」第 6 卷 1936 年 11 月理想出版部 218 頁
- ¹⁰ 三頭谷鷹史「宿命の画天使たち 山下清・沼健一・他」2008 年 6 月、美学出版 27 頁
- ¹¹ 同前（1939）「特異児童作品集・園児作品集の出版に方りて」春鳥舎
- ¹² 戸川行男「意志教育の理論と実際早大文学部編「哲学年誌」第 1 1 卷 1941 年 12 月理想出版部、49 頁
- ¹³ 戸川行男「特異児童」（1936）目黒書店 134 頁
- ¹⁴ 同前「特異児童」167 頁
- ¹⁵ 同前「特異児童」168 頁
- ¹⁶ 同前「特異児童」171 頁
- ¹⁷ 同前「特異児童」229 頁
- ¹⁸ 同前「特異児童」230 頁
- ¹⁹ 同前「特異児童」236 頁
- ²⁰ 同前「特異児童」236 頁
- ²¹ 同前「特異児童」238 頁
- ²² 同前「特異児童」245 頁
- ²³ 同前「特異児童」251 頁
- ²⁴ 同前「特異児童」238 頁
- ²⁵ 佐藤親雄「特異児教育入門」昭和 31 年、金澤書店 12 頁
- ²⁶ 同前「特異児教育入門」185 頁
- ²⁷ 戸川行男（1939）「特異児童作品集」春鳥舎 13 頁
- ²⁸ 前掲（1939）「特異児童作品集」春鳥舎 10 頁
- ²⁹ 渡辺実、先生と子供たち「同前、特異児童画の世界」10 頁、編集・発行、八幡学園、山下清展委員長松岡一衛